

XVII

草

談

議

くお味はいかがなものです

草 談 義

え一、毎度馬鹿馬鹿しい癖を一席…

何時の世でも食い気と色気と申しますのは浮世の関心事でございまして、まあ人に限ったことでもなく、生きとし生ける物、全てにとって最も大事なことでございまして。殊にこの食い気というやつはやかいでして、色気の方はまあ十日やそこら我慢したところで命には差しつかえありませんが、食い気の方はてえと、そう我慢できるもんでもございませぬ。「腹が減っては戦さは出来ぬ」とも申しまして、あっちの方の戦さも、腹が足りてから、というのが世の常というものでございませぬ。

こと酪農経営にいたしましても、牛の食い気と色気をどうするかと申しますのが儲けの要点と言われております。ここではまあ野暮な話でございませぬが、色気の話はちょっと横に置いとくとしまして、食い気の話を一いついたしたいと存じますので、しばしお付き合いを…

牛飼いの熊さん、牛飼いの仲間の寄り合いの帰り道、首をひねりながら横丁の御隠居さんの所へやって参ります。

「御免なさいよ一っ。御隠居、いなすたか一いつ、御隠居っ。」

「何だいいきなり大きな声で。あたしゃまだ耳は遠くなってないよ。普通の声でお話し。」

「ああ、いなすたかい御隠居。いやね、いま牛飼いの仲間の寄り合いの帰りなんですがね、その寄り合いの話の中で牛の物食いの良し悪しの話になったんだけど、どうもあつしにゃピンと来なくってね、それで御隠居のお知恵をちょっと拝借しようかと思ひましてね。」

「おおそうかい、物食いの良し悪しね、うーん、ちょっと長い話になるかも知れぬが、お前さん時間は大丈夫かい。」

「ええ、夕方の搾乳まではこれと一いつ。」

「うん、そうかね。おーい、花ちゃん、お茶。」

「すみません、お茶菓子でもあると話に身が入るんすけど。」

「しょうがないね、そんなことは客から言ひ出すもんじゃないよ。花ちゃん、頂き物の羊かんがあったら、切ってお出し。…え、いかほど。まあいいからあるだけ出してあげ。」

「へへへ、すみませんね、催促したみたいで。」

「みたいじゃなくて催促したんだろうが、まったく。お前さんとこの牛がみんなしてお前さん位大喰らいなら、さぞかし乳を一杯出すんだらうがねえ。」

「やっぱり沢山食うと乳も出やすか。」

「そりゃそうさ。乳だけじゃなく、予留りも良くなるし、病気だって患いづらくなるよ。」

「へえ、そりゃまたどうして。」

「うん、牛の胃袋が四つあるのは知ってるだらう。その最初の、一番大きなやつ、エゲレス語ではルーメンとか言うんだが、こいつは言ってみれば酒造りの桶みたいなもんでね、食ったエサをどんどん発酵させて消化してるんだ。」

「へえ、それじゃ牛はいつも酔っぱらってるんだ。安上りでいいね。」

「別に酒精ばかり作ってる訳じゃあないからね、酔っぱらいはしないと思うが。この発酵なんだが、草なんかは割とゆっくり消化するが、麦やとうきびみたいなデンプンっ気のはすぐに分解して酸になってしまう。この酸自体は大事な栄養なんだが、いっぺんに出す

ぎるとルーメンの中が酸性になって、発酵そのものや、牛の体までおかしくなってしまう。」

「それじゃ、やっぱり粗食にして草ばかり食わせとけばいいんですかい。」

「ところがそうもいかない。牛が乳を出すってのはえらい重労働でね、よっぽどいい草を食わせない限り、一日に二斗も三斗も乳を出すには間に合わない。やっぱり濃厚飼料の類は食わせないと難しいだろうね。」

「ふうん、濃厚飼料が多過ぎるとまいっちまう、草ばかりでも力が出ない。難しいもんですね。」

「そこでね、もし一日に食える絶対量が多くなれば、草の割合が多くなっても栄養は間に合うし、濃厚飼料が増えてもそれ以上に草を食ってくれば、大して困らない。」

「なるほど、それで物食いが良くなると儲かるって訳だ。なんか風桶みたいな話ですね。」

「まあそればかりじゃなく細かな理屈は色々あるんだが、大筋はこんな所かな。」

「それじゃその、物食いを良くする方法でやつを一つ、お願いしやす。」

「うんうん、おお花ちゃん、丁度いいところへきた。まあお前さんもそこへお座り。」

「ああ、こちらがこないだから御隠居んとこに奉公に来たってえ子だ。別嬪さんだけど、えらく涎^{よだか}を垂らしてるね。お花ちゃん、おいらこの先で牛飼いやってる熊五郎ってんだ。以後よろしくな。え、何の匂いを嗅いでるんだい。おいおい、着物の裾をしゃぶるなあやめてくれ。」

「花ちゃん、まあ落ち着いてお座り。実はね、この子はあすこの角のお寺、悲牛院さんから行儀見習いに預ってるんだが、何でも前世は牛だったそうだ。」

「へ。牛。でも今は人間でしょう。」

「ところがね、見た目はそうなんだが、中身はどっちかって言うと牛に近いらしい。何でも前世では相当苦勞した揚げ匂に一産だけで廃用にされたのが、あまりの心根の優しさに免じて仏様が転生させようと思立ったのだが、ちょっと急だったんで中身まで手を回すのが間に合わなかったらしい。」

「そんないい加減な。第一、そんな非科学的なことでもいいんですかい。これ、営農改善資料でしょう。」

「まあそう言いなさんな。この作者てえのがえらくいい加減な男らしいんでね。座右の銘が『大体良ければ全て良し』だなんて言うんだが、細かい事に文句付けてもしかたがない。」

「そりゃまあ、御隠居がそう言うんなら我慢しますがね。いくらなんでも…」

「ともかくね、中身が牛みたいなもんだから、牛の好き嫌いを知るのに足しにはなるよ。さて花ちゃんや、お前さんが物を食べる時にはまずどうするのかね。」

「えーと、あたいが食べ物を見つけるのはねえ、まず匂いを嗅ぐの。でね、食べた事ある匂いがしたらとりあえず口に入れてみて、やな味がしなかったらペロリと。」

「食べた事のない匂いがしたらどうするんだい。」

「おなかが減ってなきゃ食べないけど、おなかが減ってる時は特にやな匂いがしない限りは舐めてみて、食べれそうと思ったら食べちゃう。」

「嫌な匂いってどんなの。」

「うーん、良くわかんないけど、うんちの匂いとか、カビの匂いとか、腐った匂いとか、そうそう、あんまし鼻にツンとくるのもだめね。」

「味の好き嫌いは。」

「甘いのはだーい好き。苦いのと辛いのは苦手ね。でも、おなかが減ってる時は大して気にしない。」

「甘いたって色々あんだろ。さらっとしたのとか、くど目がいいとか。」

「よくわかんない。甘い苦いとか以外にあんまり考えた事ないの。」

「御隠居、そんなもんなんですか。」

「まあそんなもんらしいな。」

「するってえと牛が喜ぶ食べ物でえと、甘くて、苦味や辛味がなくて、うんちとかカビとか腐った物とか鼻にツンとくるような匂いがしないもの、と。」

「うん、まあそういうことらしいな。」

「それ以上細かい事はわかりませんか。」

「こないだまで牛だったんだから、あんまり無理言っちゃいけないよ。そんなにポキャブラリがある訳ないだろ。人間の言葉でそこそこ喋るだけで大したもんさ。」

「なんすか、そのポキャなんとかって。まあいいや。要はそういったことが出来るような草の作り方を考えりゃいいすね。」

「そういうことだよ。花ちゃん、御苦労だったね。羊かんでもつまんで休んでいいよ。何かあったらまた呼ぶから。」

「はいー御隠居さん。あたい羊だーい好き。」

「ありゃりゃ、あの子、一口でペロリと半分も食ってっちゃった。さすが元牛だね。」

「お前さんだって似たようなもんだろ。さっきから見てると、まるで親の仇にでも会ったみたいな勢いで食べてるが、お前さん、酒飲みのくせに、よくそんなに甘い物が食べられるね。今に糖尿病になるよ。」

「働きもんでしてね。稼ぐ分だけ沢山飲み食いしなくちゃ。」

「ふん、しょってるね。まあいい、話を戻そう。その、草の甘味だがね、甘味ってのはもっぱら糖分で決まる。」

「糖分ってえと、砂糖ですか。」

「砂糖だけじゃなく、ブドウ糖とか、果糖とかね。植物がお天道様の光で光合成ってのをやるのは知ってるだろ。その光合成で作るのがブドウ糖だ。このブドウ糖を貯め込んだりするのに他の形の糖やデンプンに作り替えるんだ。要は実際に使ってしまう分以上に糖を作れば甘くなるし、使う量の方が多ければ甘味は減る。」

「草が砂糖を使うって、どう使うんです。まさか草が料理をするとでも。」

「馬鹿言ってるんじゃない。根から吸ったちっ素分と合わせて蛋白質を作ったり、生きていくための力の基にしたり、セニをを作ったりするんだ。」

「じゃあ苦味は。」

「こっちはちょっと難しくてね。アルカロイドとか、テルペンとか言うのが原因らしい。」

「何ですかそりゃ。」

「アルカロイドって言うのは植物の中で出来るアルカリ性のちっ素化合物でね。ニコチンとか、キニーネなんてのがこの仲間なんだが、猛烈に苦いし、たいていは猛毒だ。」

「草ん中にそんな毒が入ってるんじゃ、牛に食わせていいんで。」

「実際に毒になる程の量でなくても充分苦いらしいよ。まあ、毒に当たる程沢山入ってる草は牧草には使わないからね。ところで、草に使い切れない程のちっ素を吸わせると、このアルカロイドの量が増えるという説があつてね。」

「それじゃ、草にちっ素肥料をやっちゃいけないと。」

「お前さん、そう先をいそいじゃいけないよ。ちっ素が足りなけりゃ草そのものが蛋白質を作れなくなってしまう。過ぎたるは及ばざるがごとし、ということだ。」

「杉の樽はお呼ばれのザルがごとし、と。」

「何を言ってるんだ。何でもそこそこ頃合いってえもんがあると言ってるんだよ。まあ、甘味と苦味の加減は光合成の度合とちっ素分の兼ね合いが大事ではあるようだな。」

「光合成を多くすることゝ出来ないんすか。」

「その草が本来持っている能力以上には出来そうにないな。お天道様の光を増やす訳にもいかんし。ただ、りん酸や苦土が足りないと光合成が低下するというから、りん酸や苦土はきっちり施肥した方が良さそうだな。」

「じゃありん酸は沢山やった方がいいと。」

「りん酸だってやり過ぎれば環境汚染の原因になるし、第一、金がかかり過ぎる。やっぱりそこそこって量があるんだよ。あと、カリもやはり多からず、少なからずというのが大事らしい。」

「スラリーや堆肥はどう考えればいいんですかね。有機質の肥料分は化学肥料と違って悪さをしないって言いますけど。」

「どうかねえ。量が多過ぎれば同じことだと思うけどねえ。どの道、草が肥料分を吸う時にはほとんど無機物に分解された物を吸うらしいからねえ。それに、あんまり沢山糞尿を突っ込むと草に匂いがついてしまうよ。花ちゃんも言ったろ、うちの匂いは嫌だって。」

「堆肥も切り返しすると匂いが少なくなりますやね。」

「そうね、そういう面では糞尿の発酵というのは大事だろうね。ところでお前さん、確か五十町からの草地を持っているんだから、そんなに一ヶ所にどんとやることもないだろうね。」

「それがね、どうも遠い畑にまで運ぶのが面倒で。ついつい牛舎から近い放牧地にばかり入れがちなんすよ。」

「困ったねえ、只でさえ放牧地には牛が糞尿をバラ散いてるのに、それに輪をかけて糞尿を散いてどうしょうてえんだ。それで、堆肥を入れた草地とそうじゃない草地と、施肥は分けてるんだろうね。」

「へへ、それがね、やっぱり面倒で、全部いっしょ。」

「お前さんね、面倒なのは分からんでもないが、やっぱり糞尿は広く薄く、施肥は草地に合わせてっていうのが大原則だよ。少しは考えた方がいいよ。」

「分かりやした、今度からはなるだけそうしやす。」

「あと、肥料を振る時期なんかもよく考えたらいいよ。」

「ありていにいうと、どんな風に。」

「具体的なことはこの改善資料を良くお読み。」

「そんな事言って、ほんとは御隠居、よく知らないんじゃ。」

「なに言ってるんだ。搾乳に間に合うようにはしょってるだけだよ。第一、さっき言っただろ、作者がいい加減だって。それぞれ専門で書いた人の文章を良く読んだ方が確かってもんだ。とりあえずどんな事を考えればいいのかって話だからね。」

「へいへい。」

「きてと、どこまで話したっけ。」

「肥料の振る時期で。」

「そうそう、最近どうも忘れっぽくてね。何か忘れたことは無かったかな。うん、そうそう、草の種類の話があったな。」

「草の種類、ですか。」

「チモシーとか、オーチャードとか、クローバーとかいった種類と、同じチモシーでも品種によって色々と違いがある。」

「早生とか晩生とかいうやつですね。」

「そうそう。まず、牧草を大きく分けるとイネ科とマメ科があるな。」

「チモシーやらオーチャードがイネ科で、クローバーやルーサンがマメ科ですね。」

「うん、それでね、まあ一般的に言ってイネ科は糖分が多く、マメ科は蛋白が多い。」

「じゃあ牛はイネ科を喜ぶんだ。」

「ところがそうとも限らないんだな。イネ科は甘味も多いし、サイレージにしても臭い物にはなりづらいんだが、センイが多くてしかも消化が遅い。その点、マメ科は腹一杯になりづらいんで、味さえ悪くなければ余計に食える理屈なんだ。しかも、イネ科は刈り遅れるとどんどん味も栄養も落ちるが、マメ科はそれほど早く落ちない。」

「どどのつまり、どっちがいいんで。」

「どっちってことはないのさ。要するにその草の特徴を分かった上で、有利な使い方を考えればいいってことでね。品種でも同じことさね。」

「その特徴ってのも改善資料を良く読めと…」

「そう言うこと。飲み込みが良くなってきたじゃあないか。それとね、雑草なんかも味を落とすし、ルートマットってえと、古くなった草地に出来るっていうやつで。」

「そうそう。ま、こういった具合で草そのものをうまく作るのが第一だな。ここまでうまくいけば、おあとはどうやって牛に食わせるかってえ話になる。」

「乾草かサイレージかって事ですかい。」

「あと、放牧ってのもあるよ。お前さん、放牧もやってたね。」

「へえ、二十町ばかり放牧に使ってやす。」

「放牧ってのは生えてる草をそのまま食わせるんだから、草の味がいい事と、食い易い格好で生えてるってのが大事だな。」

「草の味ってのはいいとして、食い易い格好ってのはどんなです。」

「牛ってのは舌で草を巻き取って食うからね、巻き取れるだけの長さがあれば、短かい程食い易いし、味もいいとは言うな。ただ、倒れて寝てしまった草はあんまり食わないそうだ。」

「それじゃ、伸びた端からどんどん食わしちまやあいい訳だ。」

「うん、理屈はそうなんだが、それをやられると草の方がまいてしまうんでね。再生の具合と食わせ方の加減が結構難しいようだね。それともう一つ、放牧地では牛が草の上に糞

をする。固りで落ちてる訳だからその囲りはいつまでも食わないんで、不食過繁草というやつができてしまう。」

「あ、あれには手え焼いてるんすよ。放牧地がダンダラになっちまって。」

「固りをバラバラにしてしまえば悪影響も少なくなる訳だから、掃除刈りするなり、パスチャーハローとか、タイヤハローなんかで散らばしてしまえばいいと思うんだ。まあ忙しい時期に大変だとは思いますが、やればやったなりの効果はあるようだよ。」

「えー、考えてみます。」

「お次は乾草だが、大体が根室で乾草をとろうってこと自体が難しい。」

「草時期はガスばかりですからねえ。どうしても真夏になっちまいます。」

「花が咲いてカチカチになった草をどういう牛に食べせようってのかね。そういう草は味うんぬん以前にセンイが多過ぎてすぐ腹一杯になってしまうだろうが。」

「そう言われても…。余れば売って銭にもなりやすしね。保管も楽だし。」

「ふん。まあどうしてもとろうってんなら、せいぜい味を悪くしない工夫が大事だろうね。一つにはカビを生やさないこと、もう一つは刈り倒したならなるだけ速く仕上げることだね。」

「速く上げようとする、どうしてもカビが生え易くなるけど…」

「そこでだ、あんまり収量が多いとどうしても倒伏したり、下草が蒸れてしまったりする。だから、サイレージにするみたいには量をとろうとは考えない方がいい。肥料、特にちっ素を少なくするとか、多少遅目に施肥するとかして伸びを抑えたり、古くなった薄い草地を乾草用に仕向けるとかね。」

「そうなる、量はあんまりないだろうから、うま味はないなあ。どうしようかなあ。」

「ま、よく考えるこったね。あとはサイレージだが、こいつは考えなきゃいけないことが沢山ある。」

「やり方が色々ありますもんね。タワー、平型、ロール、添加剤なんかも色々。」

「大雑把に言って、乳酸発酵させて保存性を高める方法と、酸を加えて菌の繁殖を抑える方法の二通りがあるな。どっちの場合でも大事なことは、元の草がおいしいことと空気を入れないこと、余計な土だとか糞だとかを入れないことと水分調整だろうね。」

「空気ってのはどんな悪さをするんで。」

「詰め込み直後は草自体の呼吸で糖分を使ってしまおうし、その後は酵母みたいな酸素が好きな不良菌が暴れ易くなる。二次発酵とか、^{SA}薫炭化とかは、主にこれが原因だな。鎮圧、密閉、取り出しの時なんかは充分に気を付にゃあいけない。」

「土はなんで悪いんです。」

「まず口触りは悪くなるな。砂をかむようになって、あれだ。もう一つには、酪酸発酵の原因になる菌は元々土壌菌で、土の中に一杯いるんだ。全く入れないってのは無理だろうが、少しでも少ない方がいいだろうね。」

「水分ってのは分りやすね。水っ気の多い草を詰めると臭いのなんのって。やっぱし予乾はきっちりやらにゃいけませんね。」

「乾かしゃいいてえもんでもないんだな、これが。確かに乾かす程、乳酸発酵に必要な糖分含量が上がるし、廃汁も出づらくなるという理屈なんだがね。まず、乾かすためには刈っ

た後、長いこと草地に置いとかにゃならん。するってえと、置いてる間に草自体がどんどん糖분을消費してしまう。乾き過ぎればまずマメ科の葉っぱがばらばらになって落ちてしまう。サイロに詰めてもしまりが悪くて空気が抜けづらい。開封した後は二次発酵やら自然発火やらが起き易くなる。なんにしてもそこそこ、適当な塩梅ってのがあるんだ。」

「するってえと、どの位乾かしゃいいんです。」

「いちがいに言えないな。サイロの型態とか大きさ、草の種類によって丁度いいあたりってのは変わってくるんだ。塔型のサイロだと大きい程廃汁が出易いから余計に乾かさにゃならんし、踏圧や密封のしづらい場合にはあんまり乾かす訳にもいかない。切断長によっても変わる。」

「なるほど。でも、どうしても必要なだけ乾かせなかったり、逆に乾き過ぎちまうこともありまさあね。そんなときゃあどうすりゃいいんです。」

「水分が多過ぎる時は何か添加剤を使うという手はあるな。ギ酸とか、糖とか、乳酸菌とか、色々あるが、それぞれ特徴やら使用上の注意やらがあるんで、この改善資料を良く読むなり、普及員と良く相談するなりした方がいいだろうね。乾き過ぎた場合かい。うーん、これがちょっと難しいんだが。とにかく踏圧と密封をきっちりやること、取り出しの場合もなるべく空気に当てない工夫も必要だね。それと、乾いた物の上からフタをするつもりで生草を詰めてやるというのも効き目があるらしい。ハーベスタなんかを使うときは、刃がきちんとして研いであるだけでもいくらか良いという話だ。ま、刃をきちんと研ぐというのは何の場合でも大事なことではあるな。」

「何か、考えなきゃいけないことがいっぱいあるような、考えて見りゃあたりまえのことばっかりなような。」

「そういうもんなんだな。ひとつひとつとって見るとどうってことないようなことでも、ちゃんとそれなりに科学的な理由がある。要は理屈を理解した上で、それぞれの手順をいかにきっちりやるかってことだ。」

「うーん、何となくわかったような気がしてきたなあ。家に帰ってかかあと2人でこの改善資料をよく読んで考えて見やす。」

「それがいい。今年は良い草をとっておくれ、おーい花ちゃん、熊さんがお帰りだ、お見送りしてあげなさい。」

「はーい。」

花ちゃんに見送られて帰り際の熊さん、うきうきした様子で花ちゃんに話しかけます。

「うん、ためになった。今年はいい草がとれそうだ。うちの牛も喜ぶだろうな。」

「そーね、あたいの娘たちも喜ぶわ。」

「あたいの娘って…そういや三年前、初産でこじけさせて廃用に出した牛の名前が花子…あわわわ、お助け、成仏して下さい、ナンマンダブ、ナンマンダブ…」

「やーね熊さん、べつに恨んで化けて出た訳じゃないんだから、あたいの娘たちだって幸せそうだし、なんもしやしないわよ。おいしい草をいっぱいとってあげてね。」

「へーい。」

これにて草談義、一編の終り、お粗末様でした。